

7月20日(金)に、今年度第1回の運営指導委員会、それにあわせた研究授業及び教員研修会がありました。第21号では運営指導委員会の様子や数学の手銭教諭による研究授業とその講評を紹介しましたが、第22号では、英語の竹田教諭・鎌田教諭、国語の森本教諭による研究授業とその講評などを紹介します。

○英語の竹田教諭・鎌田教諭の研究授業

これまでの実践と同じく、ディベートによる授業でした。昨年度2年生であった生徒達も3年生になり、ディベートも活発になっていると感じられました。島根大学の猫田准教授の講評は次の通りでした。

【 講評 】

- ・日本語でディベートできない内容は、英語であってもできない。つまり、ディベートの内容や質を充実させるためには、他教科の知識や連携が必要である。
- ・「良い間違い」と「悪い間違い」があるが、「良い間違い」とは教師が事前にその間違いを先回りして予測しているものである。今回のディベートで目指した目標に照らすと、表現の正確性については重要視されていない。そのため、それに関する間違いは教師が予測しているはずである。一方で、本時で目標としていた相手の意見への質問やアタックの仕方について間違いがあった場合、それは「悪い間違い」であり、事前の指導不足があったといえる。
- ・これからの英語教育であるべき生徒の姿は、「learning by doing」である。これを成り立たせるには次の3条件が必要である。

①動機付け：生徒がその活動を行う動機があること

②達成感：生徒ができたかどうかの評価をピンポイントで受けること

③ステップ：テーマの抽象度や論理構成、また英語自体のレベルを徐々にあげることに

なお、鎌田教諭は、猫田准教授から次のような個別の講評ももらったそうです。

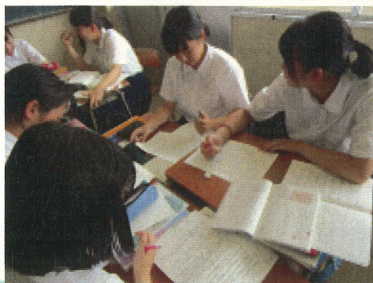
- ・事前の「良い例(モデル)」や「悪い例」のインプットがもう少し必要である。
- ・メモの取り方はスキルが必要であるため、事前の指導が必要である。
- ・ディベートとサマリーでは、言語活動の質が違う。両方の活動を混在させるのは危険である。

*サマリーとは、内容や要点を簡潔にまとめたもの。概要。要約。

○国語の森本先生の研究授業

国語科（古典B）森本先生

- ・ジグソー法
- ・復習から入る
- ・発問ベースの授業
- ・机をきちんとつける（学ぶ姿勢）



これまでと同じく、ジグソー法による実践でした。昨年度とはクラスのメンバーが違う中での実践であったため、クラスの支持的風土の醸成を再度計りながらの取り組みでした。時期は昨年度の実践より一ヶ月早かったのですが、昨年度よりも支持的風土の醸成が進んでいたように感じられました。

右のスライド【森教授が講評の時使用されたスライドより（一部改変）】にも示されているように、この授業の良かった点を次の通りあげていただきました。

- ・復習から入る。

連続して同じ授業を受けているわけではないので、前時の内容を思い出す意味でも有効である。

- ・発問ベースの授業

授業の中で生徒が考えながら学ぶ工夫がなされている。

- ・グループ活動において生徒が机をきちんとつけている。

全員が参加して学ぼうとする姿勢が出ている。

一方で森教授からは、次のような課題も示していただきました。

- ・男女間でコミュニケーション障壁があったのではないか。

授業だけではない高校での「クラスづくり」がもちろん必要であるし、その中で誰とでも活動できる能力を育んでいく必要がある。グループ活動のルール作りも必要である。

- ・ジグソーの醍醐味である言語活動が不十分だった面があるのではないか。

- ・「解答を写す」活動が必要であったか検討する必要があるのではないか。

森教授の講評に対して質疑応答が行われました。その中で、今年度初任者研修で日々授業づくりに奮闘している南口教諭から次のような質問が出ました。

「講義のスライドの中に「解答を写す」という生徒の行動が課題だとあった。自分自身の授業においても大きな課題だと感じている。生徒の「答えを導き出す力」を育てたいが、生徒にとっての勉強や授業は「答えは教えてもらうもの」という意識が根強い。このような生徒の学びへの意識の脱却と改変をしたいが、教育の研究においてはどのように考えておられるのか。」

この質問に対して森教授は次の通り回答されました。

「言われるとおり大きな課題だと思う。input → output で終わってしまうアクティブラーニング型授業では生徒の中に消化不良感ができてしまい、学習効果が低下する傾向がある。output の後に再度 input をすることで生徒の学びを確認させることが大切である。いわゆる「最後のまとめ」をすることがそれに当たる。その際、どこまで教員が「答え」を提示するのかは、それぞれの教員、クラス、生徒の環境に合わせて変える必要がある。」

「内化（課題と向き合う）が1割 → 外化（問題解決型）が5割 → 内化（知識定着）に4割」という森教授からのアドバイスは、これからアクティブラーニング型の授業づくりに取り組んでいく上で大変参考になるものでした。

